

ニジュール支所便り

2016年2月号

【編集長】小林支所長 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

今月のトピック



- 支所からのひとこと（小林支所長）
- EPT 原専門家 離任にあたっての一言
- 1月の支所の活動紹介
 - 「5S-KAIZEN-TQM」が国営テレビで紹介されました！
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
 - みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト(EPT III)
- ニジュール国内の出来事
 - 第37回 伝統相撲全国大会開催

支所からのひとこと

日本では立春を過ぎ春の足音が聞こえる时候になりましたが、ニジュールではハルマッタンがサハラ砂漠の砂を巻き上げ昼の日差しですらさざざられ、また窓を閉めた室内ですら、掃いても掃いても次の日には砂が積るような日が続いています。先日、ニアメ空港に降りる飛行機の窓から眺めていると、次第に砂の海に潜っていくような錯覚に襲われました。その昔安部公房の「砂の女」を読んだ際に理不尽な砂丘の世界を自分の頭の中で苦労しながら映像化した思い出がふとよみがえり、まさしくこの世界なのだとして一人納得しました。「砂の女」の主人公のように、外からは理不尽に見えても、その枠組みの中で生活していると知らず知らずのうちに順応し、受け入れるようになるものがある。外部者の役割は、一緒に砂を掻くでもなく、無理やり穴から引きずり出すこともなく、ましてや砂の穴から何も言わずに見守るでもなく、何気ない日常の会話を続けながらも、触発し合うことで他の選択肢があることを学び合うことなのだろうと思います。「砂の女」の主人公の生き方に従うもまたよし。また別の生き方を探るのもまたよし。

生き方の選択といえば、この国では1月30日から大統領選挙キャンペーンが始まり、各政党に定められたシンボルカラーのポスターやバナー、飾り紐が町中にお目見えし、砂に煙る町に彩を添えています。選挙支援事務所も町の角々にできて、夜遅くまでご近所の政党支持者が詰めているようで、お祭り感が高まってきました。治安面では懸念なしとしない一方で、この国の人々がどんな選択をするのか、この頃特に大規模インフラの完成や着手を宣言し、実績を主張する現政権の続投を望むのか、あるいは他の選択肢を選ぶのか、、、投票日は今月21日。JICAとしては、政争の行方がいかならうとも、市井の人々に最終的には届く支援を粛々と継続していく所存ですが、やはり気になります。

小林 知樹

EPT 原専門家離任にあたっての一言

「荒野で考える」

もうずいぶん昔のことになるが、プロジェクト事務所があるタウアと首都ニアメ間を車で毎週のように往復していた時期があった。片道 8 時間なので、ときどき休息をとる。あるとき、まったく人が住んでいない地域に車をとめた。灌木がところどころに茂っているだけの見渡すかぎりの荒野。音がしない、静寂。別の世界に来たような気がする。風が吹き抜け、灌木の葉を揺らし、ほほに触れる。その時、われに返った。そしてある人の言葉を思い出した。それは、短期間で就学率 100%を達成したことで有名なレユニオンという小さな国の基教育大臣の UNESCO の講演を締めくくった言葉だった。

「いままで、いろいろと教育政策の成功のために必要なこととお話してきましたが、私自身がもっとも大事にしていることは、人の話を直接聞くことです。教員、校長、教育省の役人、親、すべての人の話を、ひとを介せず聞いていました。小学校 1 年生も、先生方に教室の外に出てもらい、彼らの話を直接聞きました。これらの話の中に、教育政策を成功に導く鍵がありました。」

プロジェクトは最終的に学校教育の改善を目指しているのに、学校に行っても会っているのは、行政官、教員や親のみ、生徒が何を考え、どのような授業を受けているか、ほとんど知らない、とその時思った。忙しすぎて目の前の活動以外考える余裕がなくなっていたのかもしれない。それ以来、機会があれば、時間を作って教室の隅で授業を見ているようになった。授業の様子は衝撃的だった。ほとんどの教室で先生はごく一部の優秀な生徒だけを相手に授業をして、あとの生徒は人形のように座っていた。これではほとんどの生徒は、授業に出席してもなにも学ぶことはできない。高い教育の質は望むべくもない。その後、この状況を改善するため 10 年間、政府は教育の質の改善に主な目標とした教育計画を実施してきた。しかし、現場で見聞きた現実や、プロジェクト活動の中で実施した学力テストの結果から、教育の質が低下しているのではないかという危機感を抱いていた。

この危機が 2014 年に実施された PASEC というフランス語圏各国が参加する学力アセスメントの結果で現実のものとなった。PASEC は、小学校 2 年生と 6 年生の算数と語学の学力テストしているが、ニジェールは、算数、語学そして 2 年生と 6 年生のすべてで、このアセスメントに参加した 10 カ国の中で最下位であった。もっとショッキングだったことは、ニジェールの生徒の 9 割は小学校に入っても必要とする能力を得ないままで学校を去ることが明らかになったことだ。原因は、急激に増える就学対象人口、教育省の無策、ドナー調整不足など、多数挙げられるが、確かなことは、長期間で包括的な巨額の予算の教育計画を策定したにも関わらず、ニジェールの基礎教育の質は改善しないと簡単に予測できることだ。9 割の生徒が学べないというのは、少し質が悪いというレベルではなく、危機的状況だ。この状況を改善するために必要なのは、通常の支援ではなく、緊急支援だ。もちろん、教育の質の改善にはカリキュラム、教科書、教員養成の質などを改善していくことが必要であることは言うまでもないが、それらの改善と同時に、みんなの学校が開発した「質のミニマムパッケージ」(モデル解説を参照)のように、カリキュラムが悪くても、教科書がなくても、先生の質が悪くても、生徒が学べる方法を至急、大々的に導入、普及すべきだと思う。そうしなければ、学びたいと思って学校に来ている生徒のニーズにニジェールは半永久的に応えられないだろう。これは、ニジェールだけでなく、西アフリカの国々が多かれ少なかれ抱えている問題でもある。しかし、教育開発の議論は建前論ばかりで、支援の仕方の優先順位を変え、緊急的な援助を並行的にすべきことを誰もいいたせない。

タウアの荒野には、もう行けなくなりましたが、今も、きっと静寂につつまれ、時々、風が吹き抜けていると思う。願わくば、ニアメでもその風が吹いて、みんなを我に帰えらせ、現実を正視させてほしいと思う。

原 雅裕

1月の支所の活動紹介 「5S-KAIZEN-TQM」が国営テレビで紹介されました！

“5S-KAIZEN-TQM”(以下5S)と聞いてもピンと来ない方もいるかもしれませんが、5Sとは「整理・整頓・清掃・清潔・躰」、KAIZENとは、日本の製造業で生まれた工場の作業者が中心となって行う活動・戦略、そしてTQM(Total Quality Management)は総合的品質管理をそれぞれ指しています。

これがなぜニジェールの国営放送で取り上げられたかといえば、2009年にJICAで実施された5Sに関する課題別研修を受けた研修員がそれを所属先の国立病院で実践した結果、それが院内でブームとなり、院内外のあらゆる場所で実践されるようになったためです。その道のりは決して平坦ではありませんでしたが、当時この病院の院長として研修に参加したイブラヒム医師(写真中央右)は研修中に5Sの魅力にすっかり惚れ込み、帰国後は粘り強くそのメリットを人々に語り続けたそうです。現在もドクター5Sと自らを呼んで5Sの普及に精力的に取り組んでおり、まさにニジェールにおける5Sの普及には欠かせない存在となっています。

さらに昨年保健省から5Sの研修に参加したばかりのサフィ医師(写真手前左)も、保健省内から5Sの重要性を発信し、ニジェールのすべての病院で実践するためのイニシアチブを積極的にとっています。

JICAニジェール支所は現在、重点課題分野を教育、農業・農村開発、サヘル地域の平和と安全の3つに絞っており、残念ながら保健分野は含まれていません。しかしながら、重点分野以外においても、課題別研修制度でこれまで多くの研修員を日本や第三国へ送り出し、研修で得られた知見をニジェールに還元する取り組みも進められています。財源や人材等の欠如により、ニジェール帰国後のアクションプランの実施に苦勞する研修員が多い中、これは特筆すべき事案であると言えるでしょう。

VTRの中でインタビューを求められた医療従事者や、その仕掛け人でもあるイブラヒム医師、国立病院のニヤンドゥ副院長、保健省のサフィ医師皆が、彼、彼女らの言葉で5Sについて誇らしげに語っているのを見て、『これなら大丈夫だ』と私自身、実感しました。最後にイブラヒム医師は「病院だけではなく、5Sがニジェールのあらゆる場所で実践されれば、きっとニジェールも日本のように清潔で、美しい国になり、それがひいては発展の原動力になるにちがいない」と熱く語っていたのが印象的でした。

これからは自分の専門分野にとらわれず、他分野にも目を向け、特に研修後の研修員のこうした地道な活動に注視していきたいと思いました。来月は、ラモルデ国立病院の突撃取材の様をお伝えします！ご期待ください!!



スタジオ撮影の様子

(企画調査員 佐々木タ子)

プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■■みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト(EPT III)■■■■

<http://www.jica.go.jp/project/niger/002/index.html>

2016年1月は、先月実施されたプロジェクト終了時評価での調査団提言も踏まえ、みんなの学校プロジェクトが開発した住

民参加型の各種教育開発モデルの拡大・普及へ向けた活動に取り組みました。

まず、みんなの学校プロジェクト群の取り組みにかかる広報・研修視聴覚教材制作のため、撮影チームがニジェル入りし、CGDES メンバー、教員、保護者・住民、教育行政官の協力の下、ニアメ市内、学校・村落にて、1 週間に渡り各種撮影を行いました。この視聴覚教材では、最終的に「一般向け広報教材」2 種、および「機能する学校運営委員会ミニマムパッケージ」「補助金有効活用モデル」「質のミニマムパッケージ」「フォーラムアプローチ」の 4 種の研修教材が制作されます。

撮影量が多く作成日程数が十分かどうか事前に心配されましたが、撮影チームとプロジェクトチームとのシナリオにかかる事前の綿密な打合せや、撮影現場の事前準備、そして現場での柔軟な対応により、かなりの分量にもかかわらず質の高い撮影に成功しました。

「機能する中学校 COGES モデル」開発パイロット活動においては、先月実施した研修を受け、ニジェル国内初となる「中学校 COGES 連合」が、事務局メンバー選出の民主選挙を経て、2 県にて設置されました。学校運営委員会をコミューン(市町村)レベルでグループ化した初等教育に対し、中学校においては、県レベルの中学校 COGES をグループ化しています。また、連合設置後の第 1 回連合総会にて、連合総会・事務局会合といった基本活動に加え、統一模擬試験等を含む地域教育開発活動が今年度の COGES 県連合活動として計画・承認されました。これら連合設置および連合活動の実施を通して、県レベルの中学校 COGES の活動モニタリング、教育行政・地方行政、その他教育パートナーとの仲介・調整、県内教育開発への牽引役としての役割が期待されます。

「質のミニマムパッケージ」・「補助金有効活用モデル」においては、先月に引き続き、モデルの拡大・普及へ向けた関係者能力強化に取り組みました。まず、昨年度質のミニマムパッケージ対象校に対しては、昨年度から新たに開発したドリルの現場での実践へ向けて、ファシリテーター再研修を行いました。また、GPE(教育のためのグローバルパートナーシップ)資金の学校補助金対象 180 校に対する質のミニマムパッケージモデル導入を目指し、算数ドリル活動のファシリテーター講師研修、ならびに各対象 CGDES のファシリテーター研修を実施しました。

なお、世銀等への情報共有・働きかけにより、質のミニマムパッケージにおける算数ドリル活動の成果が十分に認められ、来年度 GPE 資金の補助金対象予定である 2000 校中、1000 校への質のミニマムパッケージ導入が 2016 年度計画に盛り込まれることとなりました。

来月以降は、引き続き各種モデルの拡大・普及へ向けた活動を進めるとともに、4 年間にわたるみんなの学校プロジェクト第 3 フェーズの総まとめへと取り組んでいきます。



学校の屋根に上ったの撮影

(EPT 専門家 影山晃子)

ニジェル国内の出来事 ～第 37 回 伝統相撲全国大会開催～

ニジェルの最大かつ伝統的なスポーツイベントといえば、やはり一番に相撲が挙げられます。今年で 37 回目を数えるこの伝統行事、初日の開会式は正式な国の休日になるほどで、まさに国を挙げての一大イベントです。開催地は、ニジェルの 8 つの州の持ち回りで、今年は首都ニアメから南東へ約 100 km に位置する地方都市ドツで執り行われました。

各州から集まった、筋肉隆々たる選手たちの取り組みが連日行われ、ニアメではラジオやテレビにかじりついて観戦する人々の姿もよく見かけました。

もちろん日本の相撲とは、ルールも、土俵も、大きく異なり(相撲というより、レスリングに近いかもしれません)、長い試合では 1 時間を優に超えることも珍しくありません。1 年の中で最も涼しい時期であるとはいえ、日中は 30 度を超える厳しい暑

さが選手たちの体力を容赦なく奪っていきます。決勝は、前回の優勝者で、かねてより優勝候補と目されていたドツソ代表と若きニアメ代表の対戦。白熱する試合は 30 分以上続き、最後はドツソ代表が鮮やかに相手を押し倒しました。開催地代表ということもあり、会場の熱狂ぶりは最高潮に達していました。相撲好きの筆者は、できることならその場に行ってその喜びを一緒に分かち合いたいと切に感じた次第です。

今年の優勝サーベルはドツソのイサカ・イサカ選手が死守しましたが、この国大統領選のゆくえも大変気になるところです。伝統相撲のように正々堂々と、クリーンな戦いを期待したいものです。



(2016 月 1 月 18 日付『Le Sahel』より)

(企画調査員 佐々木夕子)